

# 順接と逆接の論理からみた「やっぱり」の機能について

曹 再京

キーワード：順接、逆接、前提、談話機能

## 要 旨

順接と逆接の論理を盛り込むことによって、「妥当な推論の結果としての話し手の判断」と「話し手の認識の確認や再確認」という二つの機能が「やっぱり」には認められる。さらに談話においても、複文より複雑な構造をなすものの、順接と逆接の論理が適用される。その結果、順接の論理からは、応答表現としての「やっぱり」の機能が認められ、逆接の論理からは、発話を修正する (repair) 機能が認められる。そして、話者交替 (Turn-taking) のシステムにおける発話の順番取りの機能、話題導入のシグナルとしての機能が両論理から認めれる。

## 1. はじめに

「やっぱり<sup>1)</sup>」は、副詞というカテゴリーの中で説明されることが多い。しかし、命題と命題を関係づけ、又、命題や文脈を超えたレベルでも表れる。そして、「やっぱり」は、常に何らかの前提のもとで使われ、それには語用論的な前提を含むものが多い。以上のことから、「やっぱり」の本来の働きそのものは、談話の中でその機能を捉えるべきであろう。つまり、「やっぱり」は品詞のカテゴリーの中では副詞とされるものの、すでに談話性を備えた性質を持った語であることと考えられる。

従来の研究では、副詞を分類する際、「やっぱり」を陳述副詞と異なり「その他」として扱うことが多かった。これは、「やっぱり」の機能が従来の副詞の概念では捉えきれないものであったからである。従って、陳述副詞のようなカテゴリーに収まらないのは、それに所以することであろう。

日本語は副詞的な機能を持つ語が豊富であり、形態的にも意味的にも多様である。そのため、副詞の研究は個別的もしくは総合的に行われてきた。

本稿で取り上げる副詞「やっぱり」については、従来様々な観点から議論が行われてきたが、その機能については未だ明らかにされていない。「話し手の主観

的・心理的態度」を表すと言われる「やっぱり」は、日常会話の中で頻繁に用いられている。にもかかわらず、「やっぱり」の機能がこれまで明確に捉えられていなかったのは、そもそも「やっぱり」が多義の性質を持ち、そして、基本的に平叙文・疑問文・命令文など幅広く表れ、特別な叙法の制限を持たない極めて多機能的な側面があるからであろう。

「やっぱり」は、一見順接の用法のように使われる場合もあれば、逆接の用法のように使われるものもある。蓮沼(1987)では、「さすが」を順接・逆接によって説明している。

そこで、順接と逆接の論理を盛り込み、かつ先行研究の結果を踏まえて上で、談話における「やっぱり」の機能を明らかにする。

以下、「やっぱり」の機能について、複文を用いて順接と逆接の論理から従来の考え方を取り入れながら、再検討をし、その機能を明らかにしたい。

## 2. 先行研究

「やっぱり」は副詞のカテゴリーの中で、その位置付けが曖昧である。『新明解国語辞典第5版』『日本語教育辞典』等の辞書の意味記述をみると、「やっぱり」について「思った通り」「案の定」「同様に」等のように、大概類義語の体系の中でその意味・用法が記述されている。これらの辞書の意味記述は、森田(1995)の指摘のように基本的に「過去の状態から推して、対象の現在の様子はこうに違いないと頭の中で描き、それが現実に予測と一致したとき発する言葉である」という捉え方である。しかし、「やっぱり」は「思った通り」「案の定」等のように、話し手の予想や期待通りであるという意味用法を表す場合もあるが、話し手が予想ないし期待したにも関わらず、その予想や期待が外れてしまった場合にも使われることがある。したがって、様々な意味用法の広がりを持つ「やっぱり」はその機能から一貫して説明されなければならない。

従来の意味用法を追究したものに対し、「やっぱり」の機能的な面を重視したのが、西原(1988)と蓮沼(1998)である。西原は「やっぱり」の機能を「話し手の日常的推論体系」として捉え、命題・文脈・談話の各領域において「予め持っている自身の信条を主張している」のが「やっぱり」であるとしている。

また、蓮沼では、「やっぱり」の機能を、「前提命題と当該命題の適合の再認識・確認」と述べる。

しかし、これらは「やっぱり」の前提と結び付けてその機能を捉えようとした

説得力のある説であるが、いずれも様々な用法の広がりを持ち、談話の中で頻繁に用いられる「やっぱり」を統一的に説明していない。

多機能的で多用な意味用法の広がりを持つ「やっぱり」がどのような条件でどのように働くのか、先行研究ではまだ明らかでない点が多い。

### 3. 「やっぱり」における前提

一般に、日本語の副詞は何らかの予測を前提として現状を把握する類が多くあると言われてきた。「やっぱり」もその一つである。

「前提(presupposition)」<sup>2</sup>という概念は文法上の概念でないため、曖昧であるが、一般的に大きく「意味論的なもの」と「語用論的なもの」があるとされる。意味論的前提は、文の真理値に関わるのか否かという論理的な概念を問題とする。つまり、「実際に発話される場面や文脈に関する要因、話者の信念などとはいっさい無関係である。」それに対して語用論的な前提は、発話とその発話が実際に使われる場面や状況との関係で推測できるものであり、発話成立の必要条件として捉えられる。したがって、話し手の判断や認識を表すという「やっぱり」は、発話以前の何らかの語用論的前提を示唆するものである。

金田一(1962)では、日本人の愛用語の一つとして「やっぱり」を取り上げ、「人とは特に違って意見をもっていないこと」、「自分の言うところは一般法則にあっている、その例外ではないという意味で愛用されるものである」<sup>3</sup>と述べられる。つまり、「やっぱり」の発話以前の前提として、社会の通念や世間一般の常識がすでに存在していて、それに照らした結果が、話し手の判断や認識と一致するという捉え方である。

しかし、「やっぱり」には、このほかに、個人の認識や客観的なものによる場合もある。例えば川口(1993)等で述べられているように、一般に「やっぱり」の前提には「社会通念・世間一般の常識」「話者の主観」「客観的状况」、この三つがあると言われている。

「やっぱり」が示唆するこれらの前提は、言語形式による明示的なものと発話以前に存在する非明示的なものがある。「社会通念・世間一般の常識」は常に暗黙の了解として存在するため、これらの前提に着目して、「やっぱり」の機能を導きだすのは、無理があるであろう。そこで、以下、順接と逆接の論理をもち込み、「やっぱり」の機能を明らかにしたい。

#### 4. 順接と逆接の論理における「やっぱり」の機能

##### 4. 1 順接における「やっぱり」の機能

「やっぱり」はある根拠をもとに話し手が判断するという「根拠—帰結」の関係を表すとされる。このような関係を的確に表すのが次のような例である。

①「星が出ているから、やっぱり明日もいい天気だろう。」

②「顔色が悪いので、やっぱりどこか悪いかもしれない。」

一般にある出来事から当然予想されるような展開を順接と呼ぶ。①②はいずれもある根拠をもとに話し手が判断するという「根拠—帰結」の関係を表す順接用法である。＜X（だから）→ Y＞のような構造で、前件のXから後件Yが導き出される。前件Xは話し手が後件Yのように判断する根拠を示す。

この他、条件を表す「ば」「と」「なら」「たら」等の用法も順接の論理<sup>4</sup>が働く用法である。

③「だれでもほめられれば、やっぱり嬉しいものだ。」

④（来ると約束していたお客がなかなか来ない状況で）

「これだけ待っても来ないのだとしたら、やっぱり今日は来ないでしょう。」

③のように、一般についての条件関係を述べる表現は、「Xが成立すれば必ずYが成立する」という意味を表す。特定のことに関わらず、恒常的に成り立つ論理的かつ法則的な関係や因果関係を表す。

④のように、確定した前件の現状や相手の情報に基づき、このような現状や事実をふまえれば、話し手が後件のYと判断するのは当然の結果であることを表す。つまり、Xは話し手の判断のYに対して妥当な根拠を示すものである。話し手は予めお客が来ないと予測したわけではない。現場の状況からそう考えざるえないことを表すわけである。「やっぱり」は、話の現場において、話し手が遭遇している状況からそう推論するしかないという、話し手の推論の妥当性を強調するものである。したがって、順接の論理における「やっぱり」の意味機能は、「話し手の判断が妥当な論理の推論の結果」であることを表すものである。

このような理由や原因・条件の用法を用いる順接の論理において「やっぱり」は、＜X（だから・ば）→ やっぱり Y＞のように、後件Yの話し手の判断が前件Xの根拠をもとに推論した結果であることの妥当性を強調するのである。つま

り、順接の論理は、ある出来事から当然予想されるような展開を表すことで、話し手の予想や期待どおりの結果や判断を示す「やっぱり」の意味機能と最も適合する方法であろう。

#### 4. 2 逆接における「やっぱり」の機能

順接に対して逆接用法は、前件から予想できないことを表す。前件と後件の内容が対立したり、前件のことから予想される結果と反対のことが後半に述べられる。要するに、 $\langle X \text{ (が・けれども・のに)} \longrightarrow \text{やっぱり } Y \rangle$ の形式で、出来事そのものは変わっていないが、話し手の予想や期待は当てはまらない用法である。

- ⑤「一生懸命勉強したから合格すると思っていたのに、やっぱり不合格だった。」
- ⑥「今日の試合はがんばったが、やっぱり負けてしまった。」
- ⑦「人が一緒にいれば、意見の食い違いや面倒なこともあるとは思いますが、やっぱり家族と一緒に住むことは、かけがえのないことだと思うのです」(朝)

⑤⑥のように「不合格だった」「負けてしまった」ということは、「一生懸命勉強した」「がんばった」ということから、予想外のものである。したがって、予想が成り立つはずなのに、そうではないという結果になっているのである。また、⑦のように前件 X のことを認めたものの、後件 Y に X と異なった判断を下してしまう。このように、話し手の予想や期待とは食い違ってしまって、後件は前件の根拠から導かれる妥当な話し手の判断ではない。しかし、この場合、この発話以前にそうなるという前提があり、発話時においてそれを予め確かめるのである。つまり、「やっぱり」の使用における前提となる何らかの条件が話し手の認識の内面に内在し、話し手の認識の確認として働くのであろう。したがって、逆接の論理における「やっぱり」の意味機能は、「話し手の認識の確認や再確認」であることを表すものである。

以上、順接と逆接論理における「やっぱり」の機能について纏めると、順接においては、話し手が Y と判断する根拠が前件 X に示される。「やっぱり」の使用における前提 P と発話時の根拠となる前件 X が照らし合われることから、「妥当な推論の結果としての話し手の判断」として帰結する。これに対して、逆接の用法においては前件 X と後件 Y との間に論理的なギャップが生じ、前件 X は根拠として成り立たない。「やっぱり」の使用における根拠は、話し手の発話時以前に存在す

る内在的な認識によって推意<sup>5</sup>されるのである。したがって、逆接の論理における「やっぱり」は「話し手の認識の確認や再確認」として働くのである。

ところが、「やっぱり」の使用における順接と逆接の論理は相反するものであるかという点、そうではない。

- ⑧「私、ひどい環境で育って、非人間的なものたくさん見たけど、やっぱり人間はもろいなって結局いつも知った。」(N・P)

⑧で分かるように、話し手は、前件 X「ひどい環境で育って、非人間的なものをたくさん見た」ことから、「人間はもろくない」と判断したこともあるだろうが、後件 Y「人間はもろい」のように判断したのは、2重傍線の「結局いつも知った」が示すように、動かしがたい誰もが認める「社会通念」として事柄が「やっぱり」の前提であるからである。したがって、前提に従って推意して言外の事を復元すれば、複文における逆接用法も結局は順接の論理の一部であろう。

つまり、「やっぱり」の使用において最も適切なのは、論理的な根拠のもとに前提と照らし合され帰結する順接の論理である。なお、逆接用法においては、発話時における話し手の期待や予想とは外れてしまうが、「やっぱり」がもつ言外の前提が暗黙の了解として働くため、その前提を復元すれば、結局順接の論理が適用されるのである。つまり、発話成立の必要条件である前提に照らし合わせると妥当であるということになるので、結局は順接の論理が働いているのである。

## 5. 談話における「やっぱり」の機能

実際の言語を用いたコミュニケーションを行うときには、文や複文のように明快な仕組みで行われるのではない。文よりも大きな言葉のまとまりである談話は、複雑な文が集まってできているのである。そこにはどのような決まりや仕組みが働いているのか、日常のコミュニケーションにおける言語の表現や理解の仕組みを解き明かすことは、そう容易なことではない。

前節で述べたように「やっぱり」には、「妥当な推論の結果としての話し手の判断」と「話し手の認識の確認や再確認」という二つの機能が認められる。これらの機能は複文の構造の中で、順接や逆接の論理によって最もはっきりするだろう。しかし、日常会話の中での「やっぱり」は、前節で述べた複文のようにそう簡単な使い方だけではない。つまり、命題を超え、命題と命題を関係付けたり、更に

命題や文脈を超えたレベルでも使われるのである。

森本(1993)では、「客観的な世界を記述するのは文の意味的な内容であり、話し手の主観的・心理的態度を表す副詞は文の意味内容ではなく語用論的な領域に属し、コミュニケーションの目的を担う」とする。つまり、「やっぱり」は、基本的に話言葉の性質を持っているとのことであろう。以下、談話における「やっぱり」の機能について考察を試みる。

### 5. 1 応答表現としての「やっぱり」

副詞の中では、その語だけで応答を成すものがある。「やっぱり」もその一つである。話し手と聞き手の共同作業であるコミュニケーションの中では、様々な応答のし方があるのである。

⑨「あの……主人は辞表を出しましたでしょうか？」

「はい。ご存知なかったんですか？」

「やっぱり……」と、三枝の夫人は肯いて（女）

⑩「住む所、決まりましたか？」

「まだ全然。」私は笑った。

「やっぱり。」（キ）

⑨⑩のように先行する相手の発話に対して、話し手は何らかの形で反応を示さなければならない。日常会話では、これらの一連の共同作業はごく頻繁にみられるものである。相手の発言に対して応答として用いる場合の「やっぱり」は、話し手が予測した通りの結果や展開となったことに対して話し手の判断を表すものであるが、話し手も相手の発言に対し納得の意を表し、話し手自身の判断や認識も相手と変わらないということを表明する。

このように、二人以上の会話においては、話し相手の発話を受け取って、それを根拠にして次の発話者が判断や認識を述べるといったパターンが多くみられる。

「やっぱり」の使用における前提は、文脈上明示されないが、相手の発話を根拠に話し手の判断が妥当な推論の結果であることを表すので、順接の論理によるものであろう。

また、このようなパターンは、日常会話の中で、ごく頻繁にみられる相づち的なものであり、話し手と聞き手の共同作業の過程を表す大切な機能と考えられる。

⑪「そうか……。パパ、私と手を切りたいのね、そうでしょう？」　と言いだした。

「い、いや——」

「分かるわよ。急にあなたなんか寄こしてさ」　と晃子は言った。

「で、ここを出て行けっていうのね？」　その点は確かである。

「それはその通り」

「やっぱりね」　晃子はため息をついた。(女)

⑪では、相手の発話に対して最終的な話し手の認識や判断を表す「やっぱり」である。話し手は、予め予測はしていたことに対して、「情報判断一致」を求める終助詞「ね」を用いて「ここを出て行けっていうのね？」と問いただし、相手の反応を聞いた後、話し手の判断や認識の正しさを主張するのである。話し手が何らかの前提のもとで話し手の認識を示した発話「やっぱりね」を用いたため、その前提となる何らかの情報や認識を示さなければならない。つまり、相手に対して話し手が認識している不確かな情報を確かめたあと、その前提に照らして最終的に判断を下すのである。したがって、これらの談話においての「やっぱり」は、話し手の判断が論理的な推論の結果である妥当なものであるという順接の論理に支えられているのである。

## 5. 2 発話を修正する (repair) 機能

談話においては、以下の⑫⑬のような逆接の論理が働く「やっぱり」の使用が多く見られる。話の現場において、話し手は自分が述べた、また、これから述べようとする発言に対して、常に修正を行いながら、コミュニケーションを行っている。例文からでも読み取れるように、「やっぱり」には、発話を修正 (repair) する働きが認められる。

⑫ (食堂でうどんかそばか迷っている)

「うどんください。いや、やっぱりそばにします。そばください。」

⑬「ところが、この人は、気の毒なことに、子供が皆死んじゃうんですね。六人、いや七人……。やっぱり六人かな、子供ができるんですけど、皆子供のうちに死んでしまって、遂には奥さんまで死んじゃうんです。」(た)



### 5. 3 話者交替 (Turn-taking) のシステムにおける「やっぱり」

コミュニケーションを行う際、発話の順番<sup>6</sup>は日常会話の話者交替のシステムによって管理されている。談話を始めるまたは、談話が進行している中で、話を切り出すもしくは、話題を提供する場合、話し手は発話の順番を取らなければならない。

#### ⑭<手紙を見せる博子。>

秋葉「そんなあほな」

手紙を読む秋葉。

秋葉「拝啓、渡辺博子様。私も元気です」

博子「不思議でしょ？」

秋葉「でもちょっと風邪気味です。……藤井樹。こんな誰かの悪戯やろ？」

博子「かも知れないけど……でもちょっと嬉しくて」

秋葉「やっぱアレかな？」

博子「？」

秋葉「やっぱり忘れられへんかな？藤井のこと。そんなけったいな手紙まで書いて」('95Love Letter)

上の⑭から、「やっぱり」が話者交替のシステムにおいて、話し手が発話順番を取る場合に有効なマーカとして働くことがわかる。つまり、相手との会話の中で、それまでの話題から転じて、話し手が思うまたは、思っていた事柄や話題を切り出し、話し手が主導権を取る場合に「やっぱり」は有効な手段である。

話者交替というのは、会話の中で話し手が、いつ相手の話が終わるかに関して予測ができ、話が終わると同時に自分が話し始めたり、相手の終わりの発話を自分が代わって話したりすることによって成立すると言われている。

話し手と相手のやり取りの中では、会話における沈黙を避けるために、フィラー<sup>7</sup>のような言語要素が頻繁に使われる。また、話し手は自分の言いたいことを言う準備ができていない場合、フィラーのような言語要素を使う。⑭からも、話し手は「やっぱり」を用いて発話の順番を取ったものの、話し手の認識は発話時において、まだはつきりしていないことが「アレ」という言語要素で読み取れる。つまり、話し手の認識の中では内在しているものの、発話時においては話し手が忘れていることか、または、うまく言えないことが「アレ」という代名詞によっ

て表れている。「アレ」はこれから話そうとしている何かを指し示している。「アレ」という代名詞が話し手の遠くにある対象を指すことからでも受け取れるように、発話時において話し手が持っている認識は不確かなものであることがわかる。したがって、「やっぱり」は話し手の認識が前提とされるものの、発話順番を取るための接続詞的なものであり、「やっぱり」が接続詞的な品詞の広がりを持つのはこのようなことからであろう。

### 5. 3 話題導入のシグナルとしての「やっぱり」

話者交替のシステムの中で、更に話し手がそのコミュニケーションの主導権を取るためには、話し手は話題を指し示すか、又は話題を切り替えなければならない。

一般的に談話において話題を取り上げるか、または切り替える手段として接続表現が用いられる。佐久間(1997)では、「談話の話題を切り替えるきっかけを与える要因として、呼びかけ表現・言いよどみ・沈黙が機能する」と述べられる。以下の⑮は、まさにこのような働きを「やっぱり」が持っていることを示している。つまり、話し手が話題を切り出すためのシグナルとして「やっぱり」は使われ、これらは基本的に、内在的な話し手の認識から引き出すもので、「話し手の認識の確認や再確認」の「やっぱり」の機能から引き出されるものである。このような機能は、基本的に話者交替システムにおける「やっぱり」の機能と類似している。つまり、発話の順番を取るために機能と同じである。ただし、これから、新たな話題が導入されるという開始部分であるため、「やっぱり」が話題を切り出すためのシグナルとして働くのであろう。

⑮博子「ねえ」

秋葉「ん？」

博子「やっぱりさ」

秋葉「ちょっと待って。今なんかひらめきそうやねん……」

博子「……」

秋葉「……あーっ。(ひとり納得して) ちゃうか。(そして博子に) 何？」

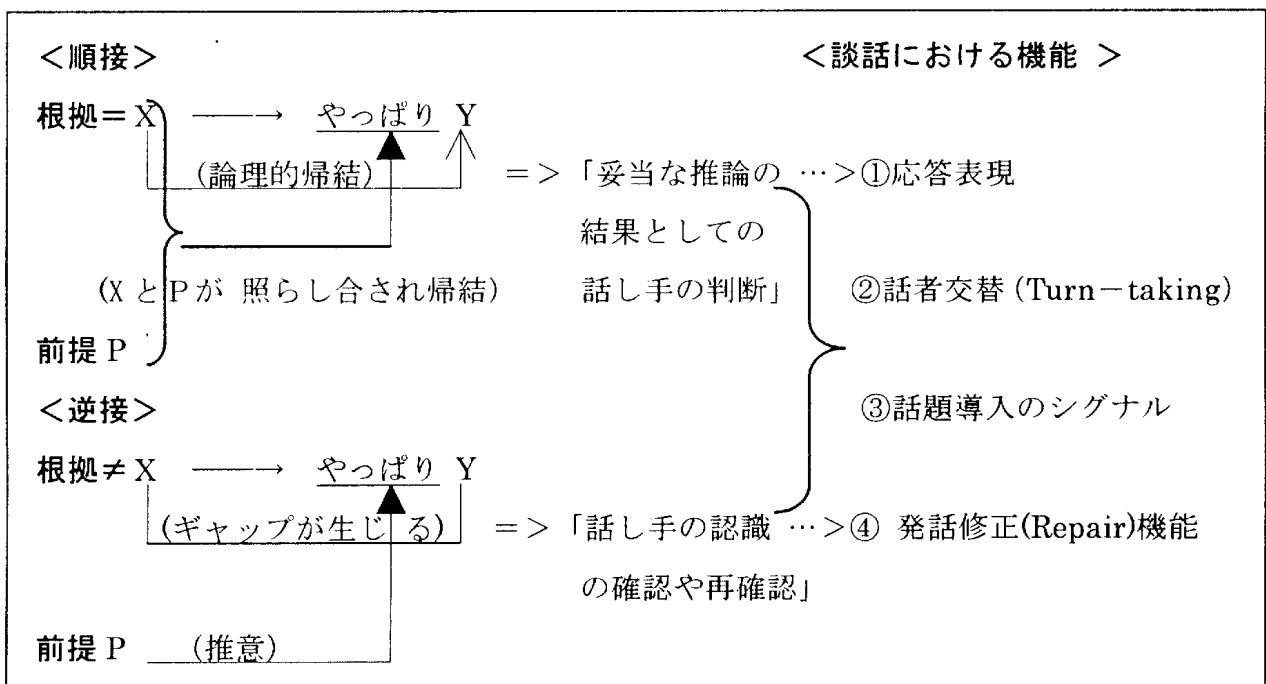
(‘95Love Letter)

### 6. 終わり

以上、「やっぱり」には、先行研究で言われる「話し手の主観的な判断を表す」

というのが基本的に認められる。そこに、順接や逆接の論理を盛り込むことによって、順接の論理上では「妥当な推論の結果としての話し手の判断」を表し、逆接の論理上では、「話し手の認識の確認や再確認」という二つの機能が認められる。そして、「やっぱり」の使用におけるこれらの二つの論理は相反するものではないことを述べた。なお、談話の中でも、命題や文脈を超え、幾つかの命題や文脈が重なることでさらに複雑な構造をなすものの、順接と逆接の論理が適用される。その結果、順接の論理からは、応答表現としての「やっぱり」の機能が認められ、逆接論理からは、発話を修正する (repair) 機能が認められる。そして、二つの論理から、話者交替 (Turn-taking) のシステムにおける発話の順番取り機能、話題導入のシグナルとしての機能が認められる。

### 【順接と逆接の論理における「やっぱり」の機能】



### 【注】

1 「やっぱり」には「やっぱし」「やっぱ」「やはり」などがあるが、文体的、位相的な差異を除けば、これらの意味・機能は変わらないものとする。本稿では、話し言葉を中心とする談話を取り上げる点で、「やっぱり」を用いることにする。

2 前提に関する定義や説明は曖昧なものが多く、本稿では、主に西山 (1982) と金水 (2000) を参考にした。語用論的前提に関しては、西山の定義によるところが大きい。金水 (2000) では、語用論的前提の定義として「Pの発話が健全に行われるためには、Qが旧情報でなければならないなら、QはPの前提である」と述べられる。詳しくは、これらの文献を参照されたい。

3 「さすが」「……だけに」もこのような意味合いで愛用されるものとして挙げている。

4 「ば・と・なら・たら」等の条件を表す用法も「根拠—帰結」の論理構造なので、表現

形式に関わらず順接の論理が働く用法として扱う。

<sup>5</sup> 日常会話においては、推定できる部分は省略し、会話を簡潔にして効率をよくしようとする。このように、省略された言外のことを推移（＝推論）と呼ぶ。小泉（1995）参照。

<sup>6</sup> 泉子・K・メイナード(1993)では、「発話順番」とは会話において一人の話者が話す権利を行使する会話中の何らかの意味機能の単位で会話の当時者によりその何らかの意味又は機能を持っていると認められたものあるとしている。

<sup>7</sup> 話しことばの特有な言語形式の一つである。「エート」「アノ」「マア」「エー」「なんか」等の表現で、話題を切り出すときや、話題と話題の間をつなぐとき、また、話の途中に挿入される言語要素である。

### 【用例出典】

（朝）『99 年版朝日新聞 CD-ROM』、(Love Letter)『95 年鑑代表シナリオ集』映人社

（た）太郎物語 （女）女社長に乾杯『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』

（キ）『キッチン』(N・P)『N・P』吉本ばなな 福武文庫

### 【参考文献】

川口良（1993）「日本人および日本語学習者による副詞「やっぱり」の語用論的前提の習得について」『日本語教育 81 号』

金水敏・今仁生美著（2000）『意味と文脈』岩波書店

金田一春彦（1962）『日本語の生理と心理』至文堂

金田一春彦他編『新明解国語辞典第 5 版』

工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『モダリティ』岩波書店

小泉保（1995）『言語学とコミュニケーション』大学書林

泉子・K・メイナード(1993)『日英語対照研究シリーズ(2)会話分析』くろしお

佐久間まゆみ他編（1997）『文章・談話のしくみ』おうふう

田窪行則他著（1999）『談話と文脈』岩波書店

津田早苗(1994)『談話分析とコミュニケーション』リーベル出版

西原鈴子（1988）「話者の前提—「やはり（やっぱり）」の場合—」『日本語学』7・3

日本語教育学会編『日本語教育辞典』

西山佑司(1982)「語用論的前提をめぐって」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』第 14 号

森田良行(1995)『日本語の視点』創拓社

森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』くろしお

蓮沼昭子（1987）「副詞の語法と社会通念—「せっかく」と「さすがに」を例として—」

小泉保教授還暦記念論文集『言語学の視界』大学書林

———(1998)「副詞「やはり・やっぱり」をめぐって」『ことばから人間を』昭和堂

—東北大学大学院生—